

# “紙切り”で昆虫を切る

## — “紙切り”から学ぶ図工における紙細工と表現 —

関 俊 一

Paper Cutting Craft

Shunichi SEKI

### 要 旨

“紙切り”という日本の伝統的な技法で、筆者自らが幼少期に体験した“紙切り”の思い出や作品を基に、小学校で実践しているワークショップと図画工作としてのあり方について考察する。

鋏で図形を切るという行為は、絵を描くのととはまた違った技術や感覚が必要である。何かを模して紙を切り、具体的に表現する為には、鋏の使い方や紙の特徴を理解し、切る図形のイメージをしっかりと記憶することが重要である。

紙と鋏で図形を切り取るという一連の流れから、どのような事を児童が学んだかを具体的に記した。

キーワード：紙と鋏、図形と記憶、図画工作

## I はじめに

紙切りとは、紙を鋏で物の形に切るという日本の伝統的な芸である。古くは江戸時代、宴の余興に音楽に合わせて様々な題材を切り抜く芸として始まり、現在は寄席の出し物として引き継がれている。

筆者が幼少の頃、二代目林家正楽師に紙切りで挑むという趣旨のテレビ番組で林家正楽師と競演させていただいた大変貴重な体験がある。私は昆虫のトンボを切ったのだが、その時の緊張感は今でも忘れられない。

切り抜いた形を台紙に挟み、観客に見せるのが普通のスタイルであるが、最近では影絵の様に投影機を使って、既に用意した作品をドラマ仕立てで見せるような林家二楽師の表現や、紙切りをペーパークラフトとして花や昆虫をモチーフに立体的に表現できるように紹介した書籍などが数多く出版されている。

今回は平成 21 年、22 年、23 年の夏休みに行われた、世田谷区立玉川小学校の児童を対象にした夏休みカルチャースクールでの実体験を基に、小学生向けの紙切り指導を具体的に紹介し、紙切りから学ぶ図工的要素について考察する。

## II 紙切りから学ぶ図工的要素

### 1. 準備・素材と道具

紙切りに必要な素材と道具について紹介する。(写真 1)

#### ○「紙」

紙は洋紙、和紙の分類の他、用途によって多様である。ここでは筆者が推薦する特に使いやすい紙を取り上げる。

白色無地のものや色彩の豊かな種類もあるが、筆者は色画用紙を使用することが多い。紙の切りやすさという点が重要であり、色画用紙の厚みが関わっている。一般的な折り紙といわれる正方形の紙では若干薄すぎて、切っている途中に細かな部分が破れる恐れがある。より丁寧な作業が必要となるため、児童には難しい。100 円ショップなどで売られている色画用紙がとても扱いやすい。色数も多くあり、冊子になっている物もある。後の項目で述べるが、色彩が豊富であると、組み合わせた際の見た目にも楽しく、色の対比についても学習になる。勿論、各自が色々試して多様な紙の中から使いやすいものを探し出すことも大切である。紙

\* 三重大大学教育学部美術教育講座

には裏表があり、繊維の方向によって折り曲げやすい方向もある。色画用紙の場合、紙の裏表は気にすることは無いが、折って切る時には紙を繊維の方向の通りに折ると、折り目が綺麗で切りやすい。

### ○「鉋」

紙切りに使用する鉋は事務用洋鉋で事足りるが、児童の手の大きさに合わせ、あまり長くない方が良さだろう。持ちやすくするため、指を入れる部分に力を入れても痛くならない工夫がされているものもある。普段から使い慣れているものが良い。

左利きの場合は左利き用を手に入れたら良い。利き手と異なる向きの鉋を使用すると、力の入り方でかみ合わせが逆になり、うまく切れず難しい。

鉋を選ぶ上で重要な事は、鉋の2枚の刃を蝶番でつないでいる外に飛び出した要ネジの部分の突出量である。これは、紙切りを進めていく際、紙が要ネジに引っかかり、切り進みにくくなるからだ。要ネジ部はなるべく突出せず滑らかな方が良い。

和鉋は構造上、握って切るので繊細な動きを必要とする紙切りには向かない。比較的大きなラシャ鉋（洋裁鉋、裁ちバサミ）も大き過ぎる為に切りにくい。美容師の使うシザーも高額であることと、切れ過ぎることから紙切りで使用するのには向かない。

### ○「台紙の作り方」

紙切りの出来上がりを観客に見せやすいように作品を挟んで提示する黒い台紙がある。切り終えた作品は平面なのでそのままでは見づらい。黒い台紙に透明なフィルム状のものを貼り付けて作ることが出来る。台紙の大きさはB4位からA3位である。台紙は厚いものだと重くなり持ち運びに不便なので、1mm厚のものが丁度良い。MUSE（ミューズ）のBKボードに同じサイズに切った極薄いアクリル板等を黒いガムテープで留める。

イラストボードと呼ばれる画用ボードには様々な色の種類もあるので台紙は黒に限ったことではない。実際に切る紙の色に合わせて選択することが出来る。しかし注意しなければいけない点は、明度や色相が近いと遠くから見えにくくなってしまうということである。見やすさを優先させるならば、明度差がある組み合わせが良い。特に目立つ組み合わせは一番明度差のある白と黒なので、作品を白い紙にして台紙を黒にすれば作品が際立ち、遠くからでも見やすくなる。

### ○「フレームに入れる」

作品として残す場合、紙切りを台紙に貼り、フレームに入れてしまう方法がある。フレームを用意し、紙

切りの作品に合った色彩の台紙をフレームサイズに合わせて切り、バランスを考えてレイアウトすれば、見栄えよく保存することが出来る。貼付ける際の接着剤はスティックタイプののりで良い。

### ○「モチーフ（題材）」

伝統的な紙切りの題材といえば、古典的なものや縁起物、動物等であるが、小学生が制作することを踏まえ、ここでは昆虫のみ取り扱う。元々、筆者が昆虫や生物が好きであったことと、子ども達にも馴染みがあり、親しみを感じられるため、紙切りに適切なモチーフであると考えた。

紙切りで昆虫を切る際に参考にするのは、昆虫標本や図鑑のように上から見た状態のシルエットである。紙切りでは、平らな紙を切っていくことが多いのだが、昆虫を切る際はシンメトリー（左右対称）を利用し、半分に折った紙を切っていく。紙を折って切るので片側だけの図形を切れば良い。切っている最中は全体図が見えている訳ではないので、切り終えた紙を広げる瞬間の楽しみがある。予想外の形の狂いやプロポーションの相違にもまた面白さが出る。

## 2. 制作

### ○「切り方の秘訣」

前述した通り、昆虫を題材にする場合は紙を半分に折ってから切り始める。練習として始めは片側に下絵を描き、下絵に沿って鉋を入れ、紙を切ることに慣れる。参考資料として図鑑を用い、切りたい昆虫を選び、右半分のシルエットを折った紙に鉛筆で写してみる。この時、あまりにも細かい足や毛などは省略しても構わない。その昆虫の特徴がわかる程度の簡略は良い。紙の矩形に合わせてバランス良く全体が収まるよう紙に描き入れる。後に切り取られた紙も作品になるので注意しておく。

鉋で紙を切る際、昆虫の様な複雑な図形は360°の範囲の様々な角度で切り進めていかなければならない。では、どのようにすれば要領よく切ることが出来るか。紙切りの秘訣として、鉋を持つ手と紙を持つ手の動かし方が重要である。鉋を持つ利き手は刃を切りやすい方向（上向きが良い）に向け、腕は固定してなるべく動かさない。利き手で動かすのは鉋の開閉の為の指の動きくらいである。

紙を持つ手はどうかというと、実はこちらの動かし方が大変重要になる。切るためだけの静的な利き手に対し、紙を持つ手は切る方向を自由に変化させ、常に図形に合わせて刃を入れられるように動かさなければならない。紙を持つ手を上手く操作することで、尖っ

た部分や丸い部分、細かな部分を容易に切ることが出来るようになる。

### ○「昆虫の難易度」

実際に切る昆虫を図鑑から選ぶ。昆虫には様々な種類がある。蝶・蛾のなかま、甲虫、蜂・蟻のなかま、蜻蛉のなかま等、多種の中から興味のある虫を選択する。昆虫のシルエットによって紙切りをする上での難しさの度合いに差があることがわかる。細かな部分は技術的に切れるかどうか、また図形が複雑な場合はそれだけ切る時間も掛かり難易度は増す。全てを写し取るのではなく、その昆虫ならではの特徴を考え、形を選ぶ。

ここでは、アゲハ、ギンヤンマ、ミヤマクワガタの三種を具体例として、切り方の要点について述べる。始めは、下絵を写しそれに沿って切っていく方法で行う。アゲハなどの蝶はシルエットもわかり易いため、モチーフとしてよく使われているのを見る。比較的切り易いので最初に試みるには良いだろう。

アゲハは全体の図形がきれいに正方形に入るプロポーションをしている。半分に折った正方形の紙にアゲハの右側のシルエットを鉛筆で写し取る。手足は描かなくて良い。折った部分にアゲハの体がかかるように注意する。(図1) 下絵を描いたら鋏で切っていく。切り始めは頭からでも尻からでも良いのだが、筆者は尻の方から切っていくのに慣れているのでそちらの方法で切ることを勧める。まず鋏をアゲハの尻へ入れ後ろ羽へと切り進む。紙を持つ手をリズムよく動かしながらアゲハの特徴とも言える後ろ羽の凸凹を表現し、前羽へと移る。前羽の前の縁を切り終わると、アゲハの中では難関の目の膨らみと触角がある。触角の先端は丸くふっくらとしていて、軸はまっすぐではなく内側に曲がり、根元に向かってだんだん細くなる様に切ると良い。ここで油断すると触角を切り落として台無しになる。(図2)

次に、トンボのなかまのギンヤンマを切る。ギンヤンマの全体的なシルエットも正方形に近く、正方形の紙を用意し、半分に折り切っていく。同様に右側のシルエットを鉛筆で写し取る。手足は図鑑では確認できるが、描かなくても良い。折った部分にギンヤンマの体がかかるように注意する。(図3) 下絵を描いたら尻の方から切りを進める。尻の先の二つの突部を表現し、長い腹部から後ろ羽、前羽と切りを進める。後ろ羽と前羽の形が違うのがトンボ全般の特徴である。前羽を切り、最後に頭部に移るのだが、首が細く目玉が横に張り出すように注意し、とても短くてシャープな触角を忘れないように注意して切り取る。(図4)

今回の作例として最も難関のミヤマクワガタを切る。

下絵を描いても上手く切り取るのは困難であろう。まず、クワガタの全体的なシルエットは前述のアゲハやギンヤンマに比べると、縦に細長いので、切る紙も正方形の半分で良い。(図5) 甲虫は昆虫の特徴である足6本が必ず確認でき、触角や顎等、複雑で細かい。クワガタは特に細い足と触角、ギザギザの顎が難しい。

下描きを写す際、足が出ている場所を良く見極めること。上から見た場合、前足、中足、後ろ足の出る場所はそれぞれ違う。関節の曲がり方、太さ、長さ、ギザギザ、爪等、足の特徴を良く観察する。爪はたいてい先が二又に分かれている。

尻部から切り込み、後ろ足を切る。先に行くほど細く複雑になる。後ろ足が切り終わるとすぐに中足がある。同じように注意して切りを進める。ここでミヤマクワガタの全長の半分に達する。この位置を覚えておけば、下絵無しで切った時の目安になるだろう。胸部にも前足があるので注意して切り進め、ミヤマクワガタの特徴の一つである頭部の膨らみを経て、目の出っ張り、触角へと進む。触角は特に難しい部分で、先が“くし状”になっていて最も切りづらい。最大の特徴の顎の形状は、先が二つに割れ、小さなとげが二本、大きなとげが一本、口部で切り終わる。複雑なので注意点も多く時間も掛かるが、切り終えた後の成果は大きく、紙を広げた時の感動も大きい。(図6)

以上、例に挙げた三種の応用で大抵の昆虫を切ることが出来る。細かいところは鋏をゆっくり動かす、緩やかな長い線はそれに合わせて紙を持つ手もゆるやかに動かす等、切り取る図形に合わせ、鋏で切る手と紙を動かす手の連動が大切であることに気付く。

### ○「下描きなしで切る」

紙切りの動作に慣れたら、次に下描きをせずに切ってみる。下絵を描かずに図鑑の資料を見て鋏を入れていく。始めは躊躇するかもしれないが、大切なのはどの辺に何があるか全体のバランスを考えることである。全体のバランスが下描き無しにイメージ出来れば形が大きく狂うことは無い。大きな印象と各部分の太さや長さなど、細部にも留意して制作を進める。ここでは資料を見て図形を真似る観察力が養われている。図画工作の中の絵画における「描く対象をよく観察する学習」と同じことである。

### ○「何も見ないで切る」

紙切りが芸と言われ伝統的な出し物になった所以である。様々な題材の中からいくつかの図形を記憶しておき、鋏と紙を用意すれば、いつでも紙切りを披露することが可能である。昆虫の図形も、始めに良く観察しておけば、何も描いていない紙のどこに鋏を入れて

いくと同じ図形が切り取られるのか、感覚としてわかるようになる、練習を重ねれば正確な図形が切れるようになるだろう。

### III ワークショップ

世田谷区立玉川小学校にて行われた“紙切りで昆虫をつくる”夏休み子どもカルチャースクールでの実践を振り返る。夏休みということもあり、子ども達が夏休みの自由研究としても提出出来るような仕上がりを考慮し、フレームに入れる装丁にした。

ある程度、鋏を使い慣れた学年ということで、小学校3年生から6年生までを対象に行った。

児童が用意して持参するものは、使い慣れた鋏、スティックのり、鉛筆である。こちらで準備したものは色画用紙（B5サイズ）一人5色、フレーム、資料として図鑑のコピー一人3種、参考作品として筆者が事前に制作したフレームに装丁済みの作品である。

#### 1. 練習

まず、紙を切る練習として円を切る。半分に折った紙を開いたときに正円になるよう伝える。下描きはしない。各自、半分の円を切れば良いことは理解しているようだが、実際にやってみると、思いのほか細長かったり、横に広がった円であったり、きれいな正円になっていないことに驚く。意外な形になった結果から、興味を増して次の作業へと進む。（図7）

ここで円だけでなく、正三角形や星の形を切らせても練習になる。

#### 2. 下絵を描いてから切る

配布した昆虫の資料を基に、まず蝶から一種選び、半分に折った紙の片側に鉛筆で下描きさせる。蝶は配布した資料の中では比較的切りやすい。

小学生においては資料を描き写すことも観察力を養う効果があり、学年や個人によって写し取る力に幅がある。多少違っていても、大きな特徴（蝶では羽と触角）が外れていなければ良い。

次に、切り方の説明をする。鋏を持つ手と紙を持つ手の動かし方を自ら実演し、観察させる。紙を持つ手の方を切る形に合わせて動かすことを理解させる。

下絵を描いたら鋏で切っていく。頭の方、尻の方、どちらからでも良いが、触角の部分に注意をするように伝える。慎重に切らないと細かい部分は破れてしまう。切り終えた作品を見ると、忠実に触角を細かく切っている作品もあれば太くなっている作品もあり、様々

で面白い。鋏に使い慣れているということ以外に性格が如実に表れる。

### 3. 昆虫の難易度を上げる

次に同じような手順で、配布した資料からトンボ、甲虫の中から次々と好きな虫を切っていく。蝶を切る際に体得した感覚を糧に各自が注意を払いながら制作していく。実際、トンボまでは上手く切れたが、甲虫の足や触角等が難しいという言葉聞く。それでも観察力のある児童は、ただ資料を写すのみではなく、切り取る際にも大変神経を使っているのがわかる。

今度は余った紙を使い、下書き無しで切ってみよう伝える。ほとんどの生徒は難しいのではないかなと思うようだが、実際にやってみると下書きが無い分、滑らかな自由な線で切れていたり、プロポーションが違っていても個性的な虫の形になっていたりして、写実とは違った表現を体感する。児童達は切り終えた後、紙を開いた瞬間に目が輝く。慎重に切り進めた苦労の後の楽しみである。

### 4. 台紙に貼付ける

切った作品は各自5点以上になり、それをフレームの台紙に貼り付ける作業を行う。フレーム自体の大きさはA4程度である。自分で気に入った作品を選び、台紙の中にどう並べるかを検討させる。色画用紙の色や、切った作品の大きさ、向き、バランスを考えて貼り付ける位置を決める。

貼る際の注意点は、細かい部分や破れそうな箇所は特に、のりを慎重に塗り貼り付ける時も同様に丁寧に扱う。台紙の余白にのりが付かないように注意させる。少し乾かしてからフレームに入れ、完成に至る。（図8 児童作品）

## IV 総評と考察

紙切りを通して、紙という素材と鋏という道具の扱い方や、制作の手順を学んできた。

紙を切るということは、鋏を持つ手と紙を持つ手の連動であり、要領を得れば複雑な図形も切り取ることが出来るようになる。

また、題材とするものの図形をよく観察することで観察力が養われ、繰り返すことで図形を記憶できるようになる。紙切り芸人も同様の訓練をしている。

児童が切った作品は少なからずデフォルメされた部分がある。形が狂っていたり、違っていたりすることの面白さはやがて形を誇張することによりオリジナル



## “紙切り”で昆虫を切る

な表現として成り立つ。

今回は完全に平面としての見せ方であったが、切り取ったものをさらに折ったり曲げたりして立体的に見せる展開もあり、正に本当の昆虫の様に表現することも可能だ。

“紙切り”を図画工作の紙細工の基礎とし、見せ方の工夫や題材を検討し、さらに発展させることを今後の課題としていきたい。



写真1 紙切りの素材と道具

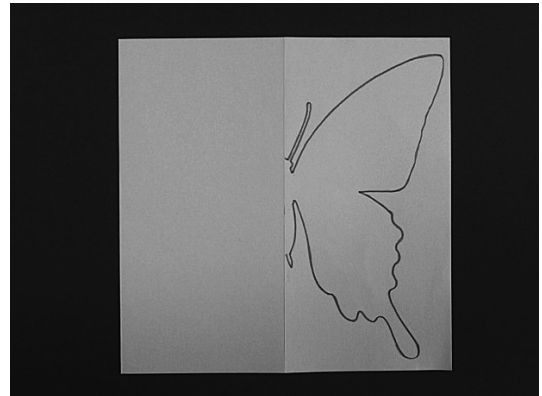


図1 アゲハ下絵

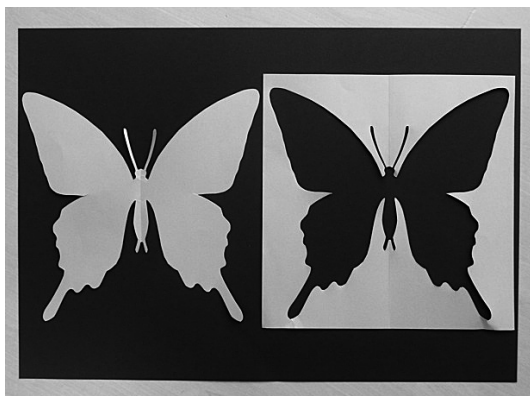


図2 アゲハ完成作品

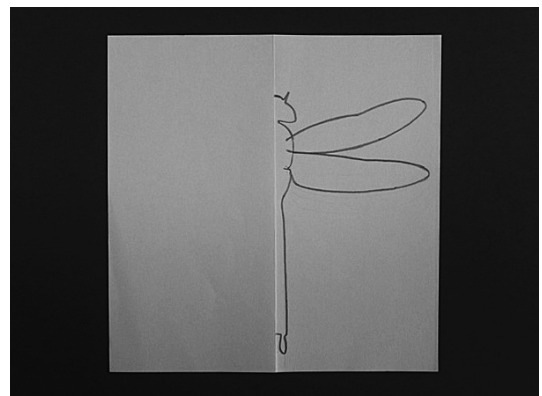


図3 ギンヤンマ下絵



図4 ギンヤンマ完成作品

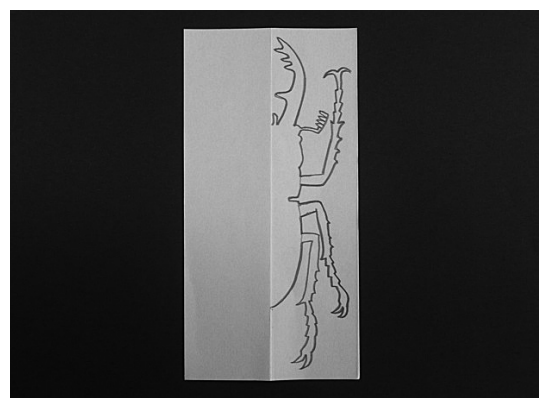


図5 ミヤマクワガタ下絵

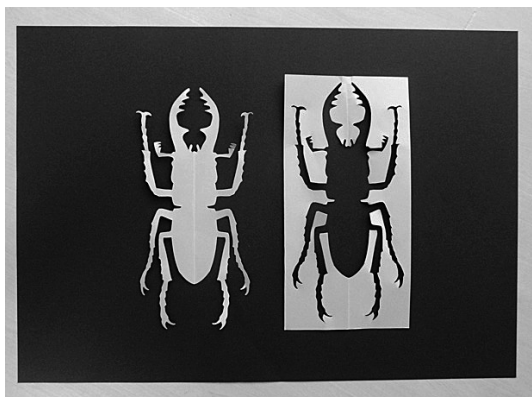


図6 ミヤマクワガタ完成作品

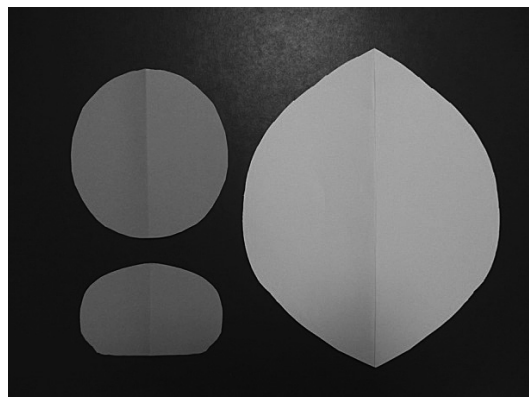


図7 正円の練習

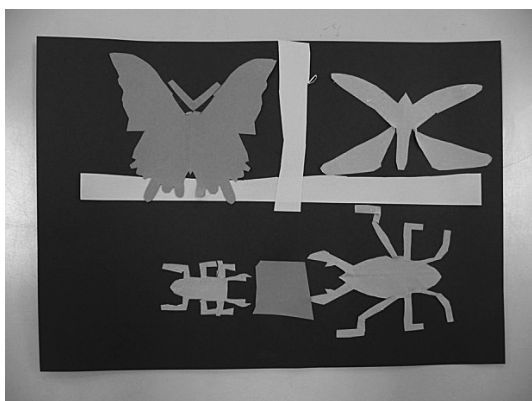


図8 児童作品／3年生作品



図8 児童作品／4年生作品



図8 児童作品／4年生作品



図8 児童作品／5年生作品



H 23 年世田谷区立玉川小学校「夏休み子供セミナー」制作風景